

Title	編集後記
Sub Title	
Author	村田, 年(Murata, Minori)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2022
Jtitle	日本語と日本語教育 No.50 (2022. 3) ,p.135- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	刊行50周年 特集：修了生の現在
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20220300-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

編集後記

コロナ禍でのオンライン授業もこの春から3年目に入ります。留学生の来日が見通せない中での苦渋の決断となりました。教育現場では依然、厳しい状況が続いています。

今年度、本センター紀要『日本語と日本語教育』は刊行50周年を迎えました。本塾の日本語教育50周年記念として第37号で特集を組んでから、すでに13年の月日が経ちました。今号では、刊行50周年の節目に当たり、「修了生の現在」として特集を企画しました。

「修了生」には、日本語・日本文化教育センターが運営する別科・日本語研修課程の正科修了生のほか、本センター教員が携わる本塾大学大学院文学研究科国文学専攻日本語教育学分野修士課程（2007年度創設）の修了生も含まれます。大学院日本語教育学分野は小規模ですが、修了生には一般の院生のほか、交換協定による院生もいます。この交換協定による院生というのは、2008年度に本塾大学の交換協定校であるマルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク（通称ハレ大学）と合同で創設された大学院文学研究科の日独合同修士課程ダブル・ディグリープログラムの留学生です。このプログラムを通じて、ドイツ側からの留学生を日本語教育学分野で受け入れ、2020年度に10期生が修了してプログラムが終了するまで足かけ12年間続きました。

日本語教育学分野は修士課程までですが、本センター教員が他大学大学院の教員と連携し、修士課程修了後に博士課程進学を志す学生を継続的に支援しています。例えば、上記ダブル・ディグリープログラム修了生の場合には、修士論文のテーマを更に発展させて研究を続けるため、ハレ大学の博士課程に進学します。その博士課程在籍期間に、本センターから、本塾研究員制度を利用した研究員ポストへの応募の機会を提供し、修了生は本センター准訪問研究員となって本塾に戻り、1年間、教員との交流の中で研究を深化させて、最終的に本国で博士論文をまとめるという形で博士号取得に至っています。ちなみに、ハレ大学側のダブル・ディグリープログラム創設責任者の日本学教授クリスティアン・オーバーレンダー（Christian Oberländer）先生も、実は本センター日本語プログラムの前身である国際センター日本語科時代の交換留学生でした。この場を借りて、オーバーレンダー先生には長年のご協力に感謝の意を表したいと思います。

このように、世代を超えて国際交流が発展し、新たな若手の研究者、教育者が生まれていくことは国際交流の本来の目的であり、本塾の地道な国際交流が着実に実を結んでいる証左だと言えます。今回の特集号の企画でも、修了生と本センター教員との交流が継続しているおかげで、全員から速やかに協力を得ることができました。

高度な日本語能力を身につけ、専門分野・領域で活躍する修了生の存在は、この日本語・日本文化教育センターが単に日本語教育の場だというのではなく、その後

の研究につながる日本語能力を十分に養える場であることを示しています。その点こそが大学で日本語教育を行う意味であり、本センターの存在意義を再認識させるものだと考えます。このような修了生の活躍する姿は、我々教員にとって大きな励みになるだけでなく、本センターならびに大学院の在籍生、また、これから入学する留学生たちにとっても大きな希望となるものだと信じます。

今号の特集では、多くの方々のご協力を得られました。巻頭では、大変お忙しい中、松浦良充所長に巻頭言をいただきました。また、現在、国際センター所長であり、日本語・日本文化教育センター前所長でもある大申尚代先生にもご寄稿いただきました。心より御礼を申し上げます。

特集の内容は、「最近の研究から」、「博士論文要旨」、「日本語教育の現場から」の三部構成になっています。「最近の研究から」には博士論文の成果を踏まえ、更に発展させた研究論文を3編、「博士論文要旨」には1編、「日本語教育の現場から」には5編の短文を掲載しました。特に「日本語教育の現場から」には、現在、専任教員として現場の最前線に立つ5名の若手教員の試行錯誤と奮闘ぶりをうかがうことができます。

特集以外には、通常の調査報告が1編、修士論文要旨3編、彙報が掲載されています。

今号に原稿を掲載した修了生は、言うまでもなく、数多くの本センター修了生ならびに大学院日本語教育学分野修了生の一部です。紙幅の都合もあり、この数年間に範囲を限定し、日本語学、日本学で博士号を取得した人、大学ならびに教育機関の専任教員に就任した人に協力を仰ぎました。執筆者の皆様には心からの謝意を伝えたいと思います。どうもありがとうございました。

最後に、現在、本センターで働く若手専任教員のうち、2名は日本語教育学分野の修了生です。そのほか、非常勤講師として本センターの運営に協力してくれている修了生もいます。彼らは、本号の執筆者の修了生達とは大学院での先輩、後輩の関係になります。本センターを軸に研究・教育の国際交流の輪が今後も継続して広がっていくことを期待します。

今秋には対面授業に戻れることを祈りつつ
紀要委員 村田 年